さいかち淵

宮沢賢治

青空文庫

八月十三日

さいかち淵なら、ほんたうにおもしろい。

しゅっこだって毎日行く。しゅっこは、舜一なんだけれども、みんなはいつでもしゅっこといふ。さういはれても、しゅっこは少しも怒らない。だからみんなは、いつでもしゅっこしゅっこといふ。ぼくは、しゅっことは、いちばん仲がいい。けふもいっしょに、出かけて行った。

ぼくらが、さいかち淵で泳いでゐると、発破をかけに、大人も来るからおもしろい。今日のひるまもやって来た。

石神の庄助がさきに立って、そのあとから、煉瓦場の人たちが三人ばかり、肌ぬぎになったり、網を持ったりして、河原のねむの木のとこを、こっちへ来るから、ぼくは、きっと発破だとおもった。しゅっこも、大きな白い石をもって、淵の上のさいかちの木にのぼってゐたが、それを見ると、すぐに、石を淵に落して叫んだ。

「おゝ、発破だぞ。知らないふりしてろ。石とりやめて、早くみんな、下流へさがれ。」

そこでみんなは、なるべくそっちを見ないやうにしながら、いっしょに下流の方へ泳いだ。しゅっこは、木の上で手を額にあてて、もう一度よく見きはめてから、どぶんと逆まに淵へ飛びこんだ。それから水を潜って、一ぺんにみんなへ追ひついた。

ぼくらは、淵の下流の、瀬になったところに立った。

「知らないふりして遊んでろ。みんな。」しゅっこが云った。ぼくらは、砥石をひろったり、せきれいを追ったりして、発破のことなぞ、すこしも気がつかないふりをしてゐた。

向ふの淵の岸では、庄助が、しばらくあちこち見まはしてから、いきなりあぐらをかいて、砂利の上へ座ってしまった。それからゆっくり、腰からたばこ入れをとって、きせるをくはへて、ぱくぱく煙をふきだした。奇体だと思ってゐたら、また腹かけから、何か出した。

「発破だぞ、発破だぞ。」とぺ吉やみんな叫んだ。しゅっこは、手をふってそれをとめた。庄助は、きせるの火を、しづかにそれへうつした。うしろに居た一人は、すぐ水に入って、網をかまへた。庄助は、まるで電車を運転するときのやうに落ちついて、立って一あし水にはひると、すぐその持ったものを、さいかちの木の下のところへ投げこんだ。するとまもなく、ぼぉといふやうなひどい音がして、水はむくっと盛りあがり、それからしばらく、そこらあたりがきいんと鳴った。煉瓦場の人たちは、みんな水へ入った。

「さぁ、流れて来るぞ。みんなとれ。」としゅっこが云った。まもなく、小指ぐらゐの茶いろなかじかが、横向きになって流れて来たので、取らうとしたら、うしろのはうで三郎が、まるで瓜をするときのやうな声を出した。六寸ぐらゐある鮒をとって、顔をまっ赤にしてよろこんでゐたのだった。

「だまってろ、だまってろ。」しゅっこが云った。

そのとき、向ふの白い河原を、肌ぬぎになったり、シャツだけ着たりした大人や子どもらが、たくさんかけて来た。そのうしろからは、ちゃうど活動写真のやうに、一人の網シャツを着た人が、はだか馬に乗って、まっしぐらに走って来た。みんな発破の音を聞いて、見に来たのだ。

庄助は、しばらく腕を組んで、みんなのとるのを見てゐたが、
「さっぱり居ないな。」と云った。けれども、あんなにとれたらたくさんだ。煉瓦場の人たちなんか、三十疋ぐらゐもとったんだから。ぼくらも、一疋か二疋なら誰だって拾った。庄助は、だまって、また上流へ歩きだした。煉瓦場の人たちもついて行った。網シャツの人は、馬に乗って、またかけて行ったし、子どもらは、ぼくらの仲間にはひらうと、岸に座って待ってゐた。
「発破かけだら、雑魚撒かせ。」三郎が、河原の砂っぱの上で、ぴょんぴょんはねながら、高く叫んだ。
ぼくらは、とった魚を、石で囲んで、小さな生洲をこしらへて、生き返っても、もう遁げて行かないやうにして、また石取りをはじめた。ほんたうに暑くなって、ねむの木もぐったり見えたし、空もまるで、底なしの淵のやうになった。
そのころ誰かが、
「あ、生洲、打壊すとこだぞ。」と叫んだ。見ると、一人の変に鼻の尖った、洋服を着てわらぢをはいた人が、鉄砲でもない槍でもない、をかしな光る長いものを、せなかにしょって、手にはステッキみたいな鉄槌をもって、ぼくらの魚を、ぐちゃぐちゃ掻きまはしてゐるのだ。みんな怒って、何か云はうとしてゐるうちに、その人は、びちゃびちゃ岸をあるいて行って、それから淵のすぐ上流の浅瀬をこっちへわたらうとした。ぼくらはみんな、さいかちの樹にのぼって見てゐた。ところがその人は、すぐに河をわたるでもなく、いかにもわらぢや脚絆の汚なくなったのを、そのまゝ洗ふといふふうに、もう何べんも行ったり来たりするもんだから、ぼくらはいよいよ、気持ちが悪くなってきた。そこで、たうとう、しゅっこが云った。
「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶこだ。いいか。
あんまり川を濁すなよ、
いつでも先生云ふでないか。一、二い、三。」
「あんまり川を濁すなよ、
いつでも先生云ふでないか。」
その人は、びっくりしてこっちを見たけれども、何を云ったのか、よくわからないといふやうすだった。そこでぼくらはまた云った。
「あんまり川を濁すなよ、
いつでも先生、云ふでないか。」
鼻の尖った人は、すぱすぱと、煙草を吸ふときのやうな口つきで云った。
「この水呑むのか、ここらでは。」
「あんまり川をにごすなよ、
いつでも先生云ふでないか。」
鼻の尖った人は、少し困ったやうにして、また云った。
「川をあるいてわるいのか。」
「あんまり川をにごすなよ、
いつでも先生云ふでないか。」
その人は、あわてたのをごまかすやうに、わざとゆっくり、川をわたって、それから、アルプスの探検みたいな姿勢をとりながら、青い粘土と赤砂利の崖をなめにのぼって、せなかにしょった長いものをぴかぴかさせながら、上の豆畠へはひってしまった。ぼくらも何だか気の毒なやうな、をかしながらんとした気持ちになった。そこで、一人づつ木からはね下りて、河原に泳ぎついて、魚を手拭

につつんだり、手にもったりして、家に帰った。

八月十四日

しゅっこは、今日は、毒もみの丹礬をもって来た。あのトラホームの眼のふちを擦る青い石だ。あれを五かけ、紙に包んで持って来て、ぼくをさそった。巡査に押へられるよと云ったら、田から流れて来たと云へばいいと云った。けれども毒もみは卑怯だから、ぼくは厭だと答へたら、しゅっこは少し顔いろを変へて、卑怯でないよ、みみずなんかで、だまして取るよりいゝと云って、あとはあんまり、ぼくとは口を利かなかった。その代りしゅっこは、そこら中を、一軒ごとにさそって歩いて、いいことをして見せるからあつまれと云って、まるで小さなこどもらまで、たくさん集めた。

ぼくらは、蝉が雨のやうに鳴いてゐるいつもの松林を通って、それから、祭のときの瓦斯のやうな匂のむっとする、ねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵に行った。今日なら、もうほんたうに立派な雲の峰が、東でむくむく盛りあがり、みみづくの頭の形をした鳥ヶ森も、ぎらぎら青く光って見えた。しゅっこが、あんまり急いで行くもんだから、小さな子どもらは、追ひつくために、まるで半分馳けた。みんな急いで着物をぬいで、淵の岸に立つと、しゅっこが云った。

「ちゃんと一列にならべ。いいか。魚浮いて来たら、泳いで行ってとれ。とった位与るぞ。いいか。」

小さなこどもらは、よろこんで顔を赤くして、押しあったりしながら、ぞろっと淵を囲んだ。ぺ吉だの三四人は、もう泳いで、さいかちの木の下まで行って待ってゐた。

しゅっこが、大威張りで、あの青いたんぱんを、淵の中に投げ込んだ。それから、みんなしいんとして、水をみつめて立ってゐた。ぼくは、からだが上流の方へ動いてゐるやうな気持ちになるのがいやなので、水を見ないで、向ふの雲の峰の上を通る黒い鳥を見てゐた。ところがそれからよほどたっても、魚は浮いて来なかった。しゅっこは大へんまじめな顔で、きちんと立って水を見てゐた。昨日発破をかけたときなら、もう十疋もとってゐたんだと、ぼくは思った。またずゐぶんしばらくみんなしいんとして待った。けれどもやっぱり、魚は一ぴきも浮いて来なかった。

「さっぱり魚、浮ばないよ。」三郎が叫んだ。しゅっこはびくっとしたけれども、まだ一しんに水を見てゐた。

「魚さっぱり浮ばないよ。」ぺ吉が、また向ふの木の下で云った。するともう子どもらは、がやがや云ひ出して、みんな水に飛び込んでしまった。

しゅっこは、しばらくきまり悪さうに、しゃがんで水を見てゐたけれど、たうとう立って、

「鬼っこしないか。」と云った。

「する、する。」みんなは叫んで、じゃんけんをするために、水の中から手を出した。泳いでゐたものは、急いでせいの立つところまで行って手を出した。しゅっこが、ぼくにもはひらないかと云ったから、もちろんぼくは、はじめから怒ってゐたのでもないし、すぐ手を出した。しゅっこは、はじめに、昨日あの変な鼻の尖った人の上って行った崖の下の、青いぬるぬるした粘土のところを根っこにきめた。そこに取りついてゐれば、鬼は押へることができない。そ

れから、はさみ無しの一人まけかちで、じゃんけんをした。ところが、悦治はひとりはさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼になった。悦治は、唇を紫いろにして、河原を走って、喜作を押へたもんだから、鬼は二人になった。それからぼくらは、砂つぱの上や淵を、あっちへ行ったり、こっちへ来たり、押へたり押へられたり、何べんも鬼っこをした。

しまひにたうとう、しゅっこ一人が鬼になった。しゅっこはまもなく吉郎をつかまへた。ぼくらはみんな、さいかちの木の下に居てそれを見てゐた。するとしゅっこが、吉郎、汝、上流から追って来い、追へ、追へ、と云ひながら、自分はだまって立って見てゐた。吉郎は、口をあいて手をひろげて、上流から粘土の上を追って来た。みんなは淵へ飛び込む仕度をした。ぼくは楊の木にのぼった。そのとき吉郎が、たぶんあの上流の粘土が、足についてたためだったらう、みんなの前ですべってころんでしまった。みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水に入ったりして、上流の青い粘土の根に上ってしまった。

「しゅっこ、来。」三郎は立って、口を大きくあいて、手をひろげて、しゅっこをばかにした。するとしゅっこは、さっきからよっぽど怒ってゐたと見えて、

「ようし、見てろ。」と云ひながら、本気になって、ざぶんと水に飛び込んで、一生けん命、そっちの方へ泳いで行った。子どもらは、すっかり恐がってしまった。第一、その粘土のところはせまくて、みんながはひれなかったし、それに大へんつるつるすべる傾斜になってゐたものだから、下の方の四五人などは上の人につかまるやうにして、やっと川へすべり落ちるのをふせいでゐた。三郎だけが、いちばん上で落ち着いて、さあ、みんな、とか何とか相談らしいことをはじめた。みんなもそこで、頭をあつめて聞いてゐる。しゅっこは、ぼちゃぼちゃ、もう近くまで行ってゐた。みんなは、ひそひそはなしてゐる。するとしゅっこは、いきなり両手で、みんなへ水をかけ出した。みんながばたばた防いでゐたら、だんだん粘土がすべって来て、なんだかすこうし下へずれたやうになった。しゅっこはよろこんで、いよいよ水をはねとばした。するとみんなは、ぼちゃんぼちゃんと一度に水にすべって落ちた。しゅっこは、それを片っぱしからつかまへた。三郎ひとり、上をまはって泳いで遁げたら、しゅっこはすぐに追ひ付いて、押へたほかに、腕をつかんで、四五へんぐるぐる引っぱりまはした。三郎は、水を呑んだと見えて、霧をふいて、ごほごほむせて、泣くやうにしながら、

「おいらもうやめた。こんな鬼っこもうしない。」と云った。子どもらはみんな砂利に上ってしまった。三郎もあがった。しゅっこは、そっと、あの青い石を投げたところをのぞきながら、さいかちの樹の下に立ってゐた。

ところが、そのときはもう、そらがいっぱいの黒い雲で、楊も変に白っぽくなり、蝉ががあがあ鳴いてゐて、そこらはなんとも云はれない、恐ろしい景色にかはってゐた。

そのうちに、いきなり林の上のあたりで、雷が鳴り出した。と思ふと、まるで山つなみのやうな音がして、一ぺんに夕立がやって来た。風までひゅうひゅう吹きだした。淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまった。河原にあがった子どもらは、着物をかかへて、みんなねむの木の下へ遁げこんだ。ぼくも木からおりて、しゅっこといっしょに、向ふの河

原へ泳ぎだした。そのとき、あのねむの木の方かどこか、烈(はげ)しい雨のなかから、

「雨はざあざあ　ざっこざっこ、
　風はしゅうしゅう　しゅっこしゅっこ。」

といふやうに叫んだものがあった。しゅっこは、泳ぎながら、まるであわてて、何かに足を引っぱられるやうにして遁げた。ぼくもじっさいこはかった。やうやく、みんなのゐるねむのはやしについたとき、しゅっこはがたがたふるへながら、

「いま叫(さけ)んだのはおまへらだか。」ときいた。

「そでない、そでない。」みんなは一しょに叫んだ。ペ吉がまた一人出て来て、

「そでない。」と云った。しゅっこは、気味悪さうに川のはうを見た。けれどもぼくは、みんなが叫んだのだとおもふ。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集　第十巻」筑摩書房
　1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行
　1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行
底本の親本：「校本宮澤賢治全集」筑摩書房
　1973（昭和48）年5月～1977（昭和52）年10月初版発行
入力：田代信行
校正：伊藤時也
2000年4月15日公開
2011年5月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さいかち淵

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/